

《研究論文1》

ベトナムにおける日本語教育・日本文化教育

Truong Thuy Lan*

ベトナムにおいて、他の言語に比べ日本語教育の始まりは遅れたが、発展は目覚ましいものであった。また、日本語教育の発展と共に日本文化教育も少しずつ盛んになっており、ベトナムと日本、両国の相互理解と友好関係の促進に貢献している。

1. 日本語教育概観

1957年にサイゴン（ホーチミン市の旧称）大学の現代語センターで日本語講座が開始されたが、これがベトナムにおける最初の日本語講座であった。4年後、1961年にハノイ貿易大学で通訳等特殊目的の日本語教育が開始され、日本語学習目的での北朝鮮、中国、ソ連などへ留学も実施された。1973年1月にはパリでベトナム戦争の和平協定が締結、9月に日越外交関係が樹立された。同年、ハノイ外国語大学で日本語教育が正式に開始された。しかし1978年から1989年にかけての、ベトナムのカンボジア侵攻により、日本からの援助が停止したため、日本語教育は10年にわたって休止した。その後ドイモイ（刷新）政策に伴い、1987年に日本語教育は再開されたが、本格化したのは1990年代に入ってからである。特に日本からの政府開発援助（ODA）が再開された1992年から、ベトナムにおける日本語教育は急速に発展した。

国際交流基金の調査によると、日本語教育の機関数、教師数、学習者数は5年間でそれぞれ

2倍ほどの増加を見せている。このような急増を引き起こす原因としては、日系企業の進出の増加や両国の文化交流活動の拡大などが考えられる。

表1 日本語教育機関数、教師数、学習者数(国際交流基金1998年度と2003年度調査)

	機関数	教師数(人)	学習者数(人)
1998	31	300	10,106
2003	55	558	18,029

教育機関だけではなく、テレビやラジオなどでも日本語の授業が行なわれている。さらにテレビでは日本の映画、ドラマや日本文化について取り扱う番組の放送時間が増え、多くのベトナム人の人気を集めることとなった。

表2は2003年度のベトナムにおける日本語教育の実施機関を初・中等教育、高等教育、教育機関以外と機関別に分類したものである。この表から、ベトナムにおける日本語教育が教育機関以外の機関で非常に広がりを見せていることがわかる。

表2 教育段階別日本語教育機関数、教師数、学習者数(国際交流基金—2003年度調査)

	機関数	教師数(人)	学習者数(人)
初・中等教育	0	0	0
高等教育	15	164	5,988
教育機関以外	40	394	12,041
合計	55	558	18,029

*お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
博士前期課程在学

2. 教育段階別の状況

2.1 初・中等教育

2.1.1 概 観

初・中等教育機関には小学校、中学校、高校が含まれる。ベトナムの教育制度は5-4-3制で、小学校は5年間（6歳～11歳）、中学校は4年間（11歳～15歳）、高校は3年間（15歳～18歳）である。うち小学校の5年間が義務教育期間となっている。

初・中等教育機関での日本語教育の展開は他の言語教育に比べかなり出遅れた。2003年12月、ベトナム教育訓練省はハノイにあるチューヴァンアン中学校を最初のモデル校として指定し、日本語教育が展開された。その後2004年9月には、ホーチミン市にもモデル校が1校開設され、全国でモデル校は2校となった。

2005年4月、ベトナム教育訓練省と在ベトナム日本大使館の間で、ベトナムの中学校、高校における日本語教育に関する交換文書が交わされた。この文書によって、2005年9月から、日本語は正式な外国語科目となった。ベトナム教育訓練省指定のモデル校も増え、その結果、ハノイで2校、ホーチミン市で2校、さらに中部の都市ダナン市、フエ市でも日本語教育が開始されることとなる。

2.1.2 チューヴァンアン中学校の場合

(1) 教師

最初のモデル校に指定されたチューヴァンアン中学校では、国際交流基金から派遣された日本人教師1名とベトナム人の教師がティームティーチングという形で授業を行っている。

(2) 教科書

現在、ベトナムの大学教員と協力して制作した中学生用日本語教科書『にほんご6』（中学1年生用）と『にほんご7』（中学2年生用）

が使用されている。どちらもベトナム教育訓練省の教科書検定に合格した教科書である。

(3) カリキュラム・授業内容

カリキュラムは、担当教師が現場の状況に合わせて計画する。

授業時間は週に8コマ（1コマ45分）行い、計6時間となっている。

授業内容は日本語文型、会話、語彙が中心である。

(4) 日本文化教育

日本人や日本文化と接触するのは生徒たちの学習意欲の向上につながるという考えから、教科書作成時からできるだけ授業に日本文化を導入することが配慮された。それを受けて、教科書には、各課の最後にミニ情報というスペースが設けてあり、日本事情、景勝地、文化などが紹介されている。また、授業中で話題として挙げられるのは私、家族、教室、旅行などのような身近な話題に加えて日本や日本の学校生活、ホームステイという話題も取り上げられている。

さらに在ベトナム日本大使館、ベトナム日本人材協力センター（VJCC）、日本商工会などからの積極的な協力を得、この1年で、「日本語祭り」（ベトナムの昔話を日本語で演じたり、日本のゲームをしたり、日本の歌を歌ったりする）、VJCC 折り紙教室の見学、日本人の友達交流会など様々なイベントを行った。

2.2 高等教育

2.2.1 概 観

高等教育機関には短期大学と大学・大学院が含まれる。期間は、短期大学が3年間、大学が4年間、あるいは5年間（医学部等は6～7年間）、大学院前期課程（修士課程）が2年間、大学院後課程（博士課程）が2年間である。

ベトナム教育訓練省の2003年度-2004年度の

調査によると、全国に国立と私立をあわせ、大学は87校あるが、そのうち専攻科目として日本語教育が行なわれているのは、2つの大きな都市にある12校のみである。ハノイで6校（ハノイ外国語大学、貿易大学、国家師範大学外国語大学、人文社会科学大学、フォン・ドン大学、タン・ロン大学）、ホーチミン市で6校（ホーチミン市人文社会科学大学、貿易大学、ホーチミン市外国語情報大学、フン・ヴオン私立大学、ホン・バン私立大学、ヴァン・ヒエン私立大学）が日本語を専攻科目として教えている。他の大学でも日本語教育が開始されたが、現在はまだ選択科目として教えられているにとどまっている。

学生の日本語能力に関して、大学では卒業時の日本語能力が2級以上に達成することを目標としている。大学や民間で受験対策が行われるようになった結果、2級や1級を持っている学生が増えているが、一方では口頭能力が低いという問題もある。

最近では、日本語学科の合格点数は英語学科に次いで第2位となっている。このことは日本語学科入学を希望する受験者数が増え、競争率が高くなっていることを示している。

2.2.2 教 師

日本語学習者が急増している一方で、日本語教師を養成する機関はまだないのが現状である。そのため大学を卒業してすぐに日本語教師になる場合も少なくない。したがって日本語教師は日本語の知識も教授法も水準には達していないというのが現状である。

日本人教師の大多数は国際交流基金の日本語教育専門家、また国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員として派遣されている。2004年からの地方における日本語教育を促進するという方針により、日本語教師派遣活動はハノイとホーチミン市の一部の機関で終了し、地方に移

行されることとなった。

日本語教師の研修は国際交流基金の他に、日本人材協力センター（VJCC）においても実施されている。

現在、国家大学師範外国語大学を中心として日本語・日本文化専攻の大学院を創設する動きも出てきている。

2.2.3 教科書

各機関で使われる教科書は同一ではない。日本の出版社の教科書（例えば『みんなの日本語』スリーエネットワーク刊）を使う機関もあるし、自作の教科書（日本の市販教材を再編集したもの）を使う機関もある。

2.2.4 カリキュラム・授業内容

授業時間はそれぞれの機関によって異なっている。現在、ハノイ外国語大学では、4年間で2200コマ（1コマ45分）となっており、日本語授業時間がベトナムの大学の中で一番多い。他の大学は1000コマ前後となっている。

授業内容は日本語演習（初級から中級まで）、日本文化、日本文学、日本事情、翻訳・通訳である（詳しくは2.2.7を参照）。

2.2.5 学習目的

学習する目的は学生によって様々である。国際交流基金の2003年度調査によれば、高等機関では、日本文化に関する知識を得るために日本語を勉強するという学生が最も多く14%、次に将来の就職のための目的を持つ学生が7%を占めている。国際理解・異文化交流の一環として日本語を勉強する学生は6%となっている。

2.2.6 日本文化教育

各大学では、毎年日本語スピーチコンテストや日本人学生との交流活動が行われ、学習者が直接日本人や日本文化に触れる機会が設けられ

ている。

教科書による情報の他に、教師自身の経験から、折り紙をする、日本料理を作る、茶道を知る、日本の歌を歌う、などの活動も授業に取り入れられている。

在ベトナム大使館と協力して、定期的に有名な日本映画を無料で上映することもある。

また、研究活動の範囲が日本文化の分野にも広がることが期待されている。

2.2.7 ハノイ外国語大学の場合

(1) 概要

日本語学部は1989年に創立された。2003年には韓国語教育も開始され、現在は日本語・韓国語学部となっている。

日本語教育が実施されている大学の中で授業時間が最も多い。また、日本語・日本文化研修留学生（1993年開始）14名のうち2～7名が合格するという最も高い実績を持つ大学である。

日本語教育実施の目的は翻訳・通訳、ビジネス、日本語教師を養成することである。

目標では2年～3年で70%の学生が2級に合格、4年で40%の学生が1級に合格することとなっているが、実際は3年で2級に合格する学生は20%、4年で1級に合格する学生は5～6%となっている。

学生は約600人在籍し、その内、正規学生は400人、在職の学生は200人である。第二外国語として勉強する学生もいる。

また、2010年までに大学院を設立することを目指している。

(2) 教師

ベトナム人の専任教師は18名（うち博士1名、修士5名）、非常勤講師は2～3名である。採用に際して特に修士や博士の資格が必ずしも必要ではない。採用後に、殆どの教師が日本へ研修に行っている。

ベトナム人教師だけでなく、日本人教師もいる。日本人教師に関しては、2004年の日本語教師派遣活動終了を受け、大学が直接に日本人教師を採用する形態をとっており、採用に関しては、日本語教育の資格を有することが条件の1つとなっている。

(3) 教科書

1学年（1200時間）で『日本語初歩』I、II（凡人社刊）を終了し、その後自作の中級教科書（日本の市販教材を再編集したもの）を使用する。2005年10月からは『日本語初歩』を『みんなの日本語』（スリーエネットワーク刊）に変更した。

日本文化や日本文学の教科書は教師自身が資料を集めて作成したものを使用している。

(4) カリキュラム・授業内容

4年間の授業時間の総数は2200コマ（1コマ＝45分）であることは既に述べたが、2学期制で、3年の前期までに初級から上級までの日本語演習を行い、その後音声学、翻訳・通訳、日本文学、日本事情、日本語文法などの授業を行っている。

具体的な授業内容は以下の通りである（2003年度）。

- ① 日本語演習：日本語文型、聴解、読解、作文、会話、中級からは通商、観光、ニュース、日本語能力試験受験対策、上級からは日本の行政、経済、法律。
- ② 日本の国と文化（5学期）：日本の政治体制（各行政機関、選挙）、風俗（日本人の習慣、年中行事、祝日とその意味）、地理（都道府県の紹介、各地の名物）。
- ③ 日本文法I、II（6、7学期）：日本語文法の特徴、ベトナム語との比較。
- ④ 日本語の音声（6学期）：日本語の音声の特徴、ベトナム人が間違えやすい発音について。

- ⑤ 通訳・翻訳（6、7、8学期）：6学期には文化社会活動、ニュース、外交活動、7学期には投資、観光、経済契約、法律に関する文章翻訳、相談での通訳、8学期にはシンポジウム・セミナーの専門通訳・翻訳を行なう。
- ⑥ 日本語の語彙（6学期）：日本語の語彙の特徴。
- ⑦ 日本文学史・日本文学：中世・近世・近代区分の文学史。夏目漱石・川端康成などの作品を読み、簡単に分析する。
- ⑧ ビジネス文章（8学期）：取引の信書の書き方。
- ⑨ 事務業務に関するもの：受付などの基礎業務について。日本の会社を場面にしたものが多い。

(5) 日本文化教育

日本文化教育には日本人教師が重要な役割を果たしている。授業で、もし可能であれば実物を見せたり、日本人の友人を呼び、学生と日本のゲームをしたり、日本の歌を教えたりすることで、日本文化を実感させている。

また、毎年、日本フェスティバルや日本についてのクイズ、日本の歌コンテストや日本料理コンテストなどのイベントも行われている。

大学の図書館と学部の図書室には日本文化に関する教材が少ないため、教師からの個人的な貸し出しもあり、学生の学習意欲を高める手助けとなっている。

日本の一般的な情報だけではなく、朝日新聞、読売新聞（主にインターネットから）などの記事を通じて現在の日本のことや社会問題も教えている。

2.2.8 問題点

ベトナムにおける日本語教育の歴史はまだまだ浅く、問題点も多い。以下にその代表的なものを挙げる。

- ① 教科書、教材、設備の不足。日本で出版された教科書を学生が手に入れるのは難しく、コピーしたものを使用している。また、各機関の図書館に日本語の教科書が少ない。現在日本語教材が一番豊かなのは貿易大学にある日本人材協力センター（VJCC）の図書館であるが、貸し出しができず、利用には制約がある。
- ② 各大学では日本語入力のできるコンピューターや閲覧可能なインターネット接続のコンピューターが少ない。このような現状も、学習者の自習や日本の情報へのアクセスを妨げている。
- ③ 大学の学部卒業生の日本語口頭能力が低い。
- ④ 専門的な知識を持つ教師が少ない。
- ⑤ 日本文化教育がまだ十分ではない。日本文化の授業はあるが、そこでは日本文化を紹介するにとどまっている。更に、紹介する内容も具体性に乏しい。
- ⑥ 日本の大学とのネットワークが弱い。

2.3 学校教育機関以外の機関

2.3.1 概観

先述したように、ベトナムにおける日本語教育は、教育機関以外の機関において非常に盛んになっている。1990年代の両国の経済及び文化交流活動の拡大とともに、民間の日本語学校が急増した。2003年の国際交流機関の調査によると、全国の40の機関が日本語教育を行い、日本語教育機関全体の73%を占めている。

日本文化に関する活動も非常に盛んになっている。生け花、茶道、合気道などのクラスが開設され、日本語はできないが、日本文化に興味があって参加するという人も多い。

2.3.2 教師

ベトナム人教師の多くは学士号を取得している。また、ほとんどの機関に日本人教師がいる。しかし、皆が教師資格を有しているわけではない。

い。

2.3.3 教科書

機関によって異なるが、主に使われているのは『みんなの日本語』（スリーエネットワーク刊）と『新日本語の基礎』（海外技術者研修協会刊）である。

2.3.4 カリキュラム・授業内容

授業の時間数は自由で、授業内容は学習者のニーズに合わせて作成される。主に日常会話や専門日本語を中心として授業が行なわれる。

2.3.5 学習目的

学校教育機関以外の機関では、就職のために日本語を学習する学習者が最も多く、34%を占めている（国際交流基金2003年度調査）。また、仕事で日本語が必要なために日本語を勉強する学習者が32%、日本留学や、日本文化に関する知識を得ることを目的とした学習者はそれぞれ17%を占めている。

2.3.6 ベトナム日本文化交流協会 日本語センターの場合

(1) 概観

1992年に設立され、日本の団体支援により日本語に関するコースを安く提供している。現在同センターの学習者数は約500人で、うち70%は学生、残りの30%は社会人となっている。

年に3回（1、5、9月）学生を募集し、募集人数には制限を設けている。

(2) 教師

専任教師は7名（日本人4名、ベトナム人3名）で、その他の教師は非常勤教師である。

(3) 教科書

レベルがA、B、Cと分かれており、AとB

レベルでは『初級日本語』と『中級日本語』（東京外国語大学刊）が、Cレベルでは『文化中級日本語』I・II（凡人社刊）が使用されている。

(4) カリキュラム・授業内容

センターでは1月、5月、9月開始の3つの学期に分けている。1つの学期は3ヶ月で、中間試験や期末試験がある。

授業は週3回あり、1回は1時間半程度である。

授業はA、B、Cレベル（これはベトナム独自の基準であり、初級前半・初級後半・中級前半に対応する）で開講される。アチーブメントテストに合格すると、A、B、Cレベルの証明書が与えられる。

授業内容は主に文法と日常会話である。ビジネス会話、観光などの専門的な日本語の授業は教師が不足しているため、まだ開講されていない。

また、学習者の要望によって日本語能力試験対策コースも開設される。

(5) 日本文化教育

日本文化教育はカリキュラムに組み入れられていないが、生け花、茶道教室などが課外活動としてよく行われている。

学習者から希望があれば、教師は授業中に日本や日本文化を紹介したり、話したりすることもある。

日本人との交流を目的としたパーティーやピクニックなども行われるが、これらの活動はセンター中心の指導ではなく、主に学習者や教師からの提案で行なわれるものである。

2.3.7 問題点

ベトナムにおける学校教育機関以外の機関での日本語教育は盛んになったとはいえ、まだまだ問題点も多い。

- ① 機関数は増えているが、授業の質も比例して高くなっているわけではない。教師が学習者のニーズに応えることのできない機関は少なくない。
- ② 適切な設備や教材を有していない機関が多い。
- ③ 教師が不足している。
- ④ 文化に関する活動が多く行なわれているが、まだ定期的な活動とはなっていない。

3. 結 論

1990年代に入り、日本との交流が広がるとともに、ベトナムにおける日本語・日本文化教育は大きな変化を遂げてきた。その変化をもたらしたのはベトナム政府の努力に加え、日本政府や在ベトナム日本機関の援助がある。

2002年に日本政府の支援を受けて、ハノイとホーチミン市に「ベトナム日本人材協力センター（ベトナム日本センター、VJCC）」が開設された。センターには日本語図書室、ビデオルーム、コンピュータールームが備わっており、日本語講座、日本語教師養成・研修なども行なわれている。また、在ベトナム日本大使館も無料で日本の有名な映画を定期的に上映したり、日本文化雑誌（Nipponia など）を配布したりして、ベトナムにおける日本語・日本文化教育を促進するため様々な活動を行ってきた。

2003年にホイアン（昔日本との商業取引が盛んであった町）で行われた日本・ベトナム文化祭、2004年にホーチミン市で行なわれた日本・ベトナム文化観光祭のような活動もベトナム人が日本文化や日本人に親しむことができる機会となっている。

しかし、日本語・日本文化に親しむ取り組みが積極的に行なわれ、学習者が年々増えている一方で、教材や設備、教師が不足していること、教師の能力が水準に達していないことなど大き

な問題が生じてきている。

今後は、2002年にハノイとホーチミン市に設立されたベトナム日本人材協力センターだけでなく、各機関、特に高等教育機関でも日本語教師の養成講座と教材・設備などにも力を入れる必要がある。また、日本への研修を希望する教師が多いのに対し、ベトナム政府からの援助は少ないという現状も問題であろう。

参考文献

1. Nguyen Van Hao 「ベトナムにおける日本語教育」
『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』
1995
2. 国際交流基金国別情報
<http://www.jpj.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/vietnam.html>
http://www.jpj.go.jp/j/learn_j/voice_j/tounan_asia/vietnam/2005/report03.html
3. 柴原智代（国際交流基金 日本語国際センター専任講師）のホームページ
<http://www.asahi-net.or.jp/%7EJ7T-MED/Shibahara/index.htm>
4. ハノイ外国語大学のホームページ
<http://www.hufs.edu.vn>
5. ベトナム教育訓練省のホームページ
<http://www.edu.net.vn/>